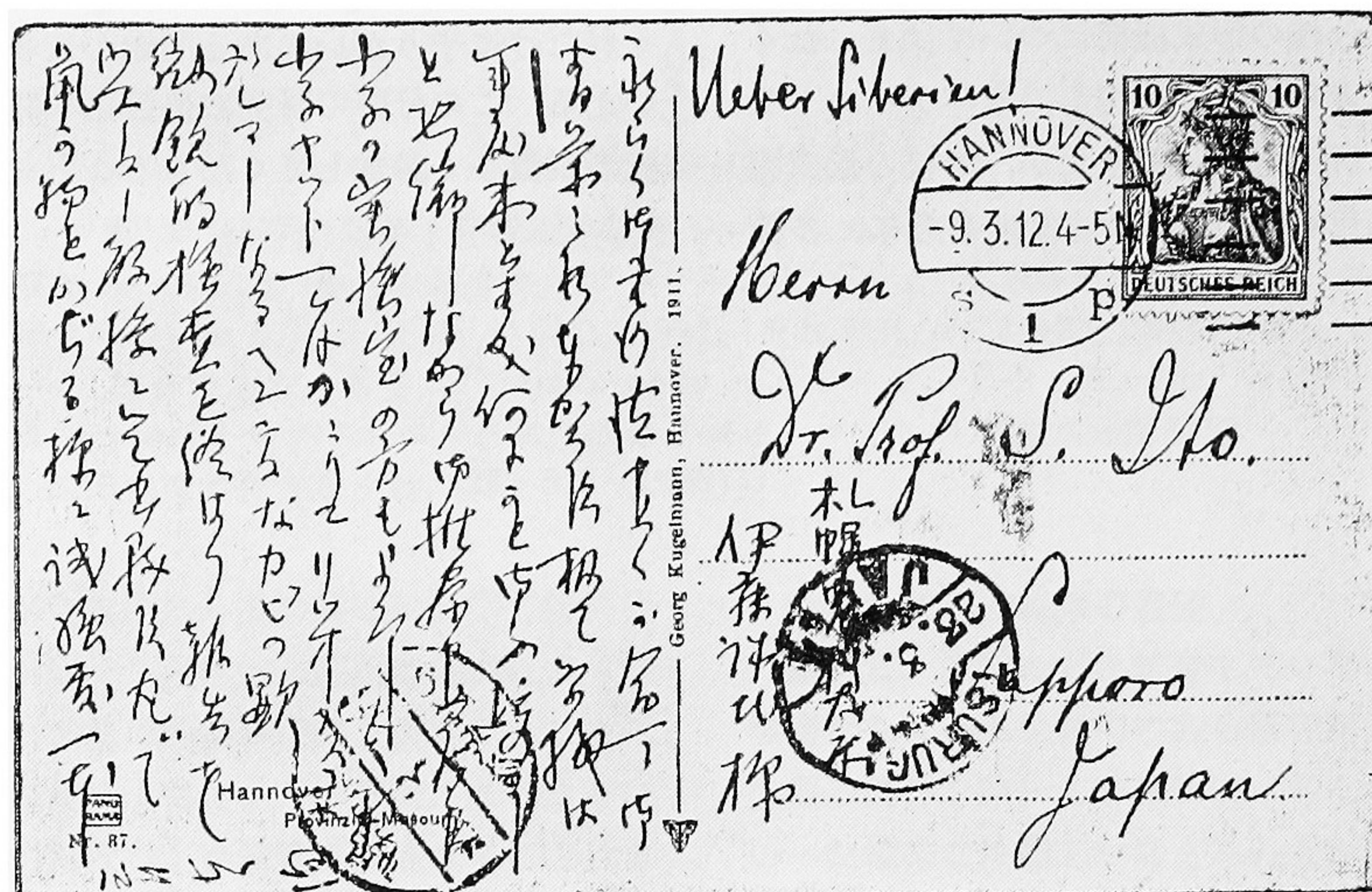


半沢 淵先生の1枚のはがき



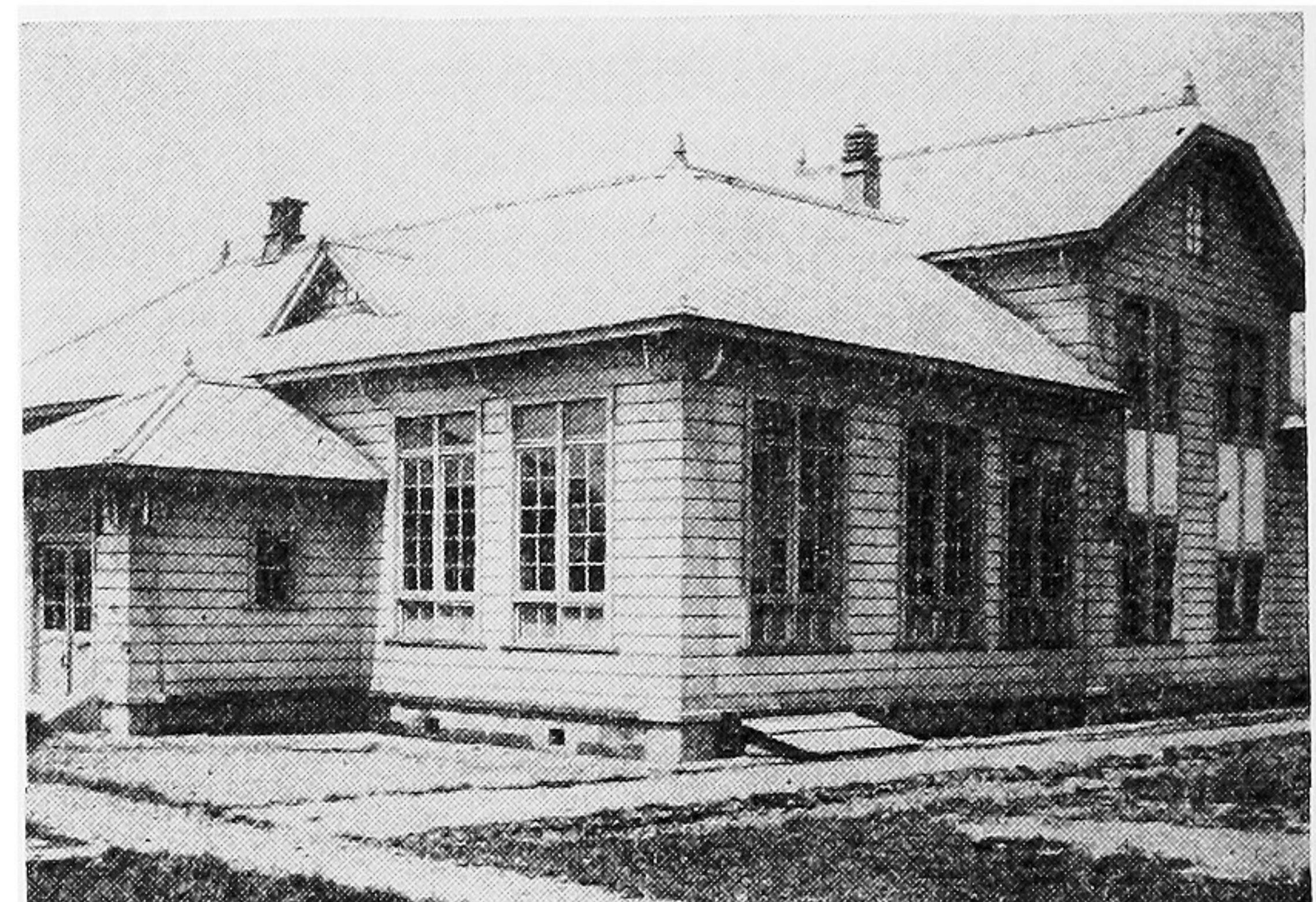
「ヤット1ヶ月かかりて、リツオーブス・デレマーなるヘンテコなカビの顕微鏡的検査を終はり、報告をウェーマー教授に呈出……」

ドイツからの古いはがきが手許にある。北大農学部応用菌学教室の創設者である半沢 淵先生が、のちの北大学長、伊藤誠哉先生にあてたもので、1912年（明治45）、ハノーバーの消印が押されている。

半沢先生は、明治34年札幌農学校を卒業後、直ちに同校に勤め、明治44年から3年間、欧米に留学された。その間、ドイツのハノーバー工科大学では、当時の発酵菌類の世界第一人者、ウェーマー博士のもとで、中国のコウジに由来するカビの研究に取り組み、これをクモノスカビの新種と認め、前記の学名、すなわち *Rhizopus delemar* WEHMER et HANZAWA と命名したのである。“ヘンテコなカビ”という表現のなかに、未知のカビを解明した33歳の若い科学者の感慨がしげばれる。

のちにこのカビが、アミロ法と呼ばれるアルコール製造法の主役として、世界の注目を浴びるようになったのは、周知のとおりである。

このはがきから3年後の大正4年（1915）、先生はわ



が国で初めて北大に応用菌学教室を開設された。写真は、その当時の竣工間もない研究室の建物である。

半沢先生は、昭和16年の退官まで、応用菌学のさまざまな分野で精力的な研究を続け、晩年には日本学士院会員になられている。昭和47年、93歳でその生涯を閉じられた。

（高尾彰一）